

全体会議（分科会報告）

第一分科会

宮澤賢治の敎化学（宮澤賢治を仏敎復興の敎化にどう用いるか）

座 長 西口玄修

問題提起 町田順文

記 録 岩田親静 塩入幹丈 松森孝雄

運 営 小瀬修達 石川修道 古河良啓

一、問題提起

東日本大震災以降、宮澤賢治が注目されている。

震災直後に立ち上げられたkizuna311というサイトで、著名な俳優が「雨ニモ負ケズ」を朗読する動画が配信されたのを始め、政治・文化・宗教・放送・出版・インターネットと、分野・媒体を問わず、非常に多くのメディアで取り上げられている。

しかし、宮澤賢治の思想・文学の根幹に、法華経や仏敎の思想があることはあまり知られていない。

アメリカ仏教の特徴として指摘されている「超宗派性」「平等性」「社会性」といった性格は、賢治の仏教思想、もしくはその実践と共通するものがある。そして震災後、見聞される宗教者の活動、特に被災地の宗教者の実践は、まさにこの性質を有しているといえるのではないか。であるならば、「復興の教化学」としての宮澤賢治、という命題はまさに「震災からの復興」と「仏教の復興」との架け橋になるのではないだろうか、という三原現宗研所長の提起を受けた。

賢治の仏教思想は超宗派的ではあるが、その根底に法華経があり、お題目があり、賢治作品の中に法華経の精神が溶け込んでいる。

そこで、震災を受けたあとのわれわれは、賢治の思想・作品・実践を通して、仏教の復興・震災からの復興を模索するヒントを得ることができるのではないかという視点から意見を求めた。

二、分科会討議

二日間にわたり、参加各聖から上記問題提起を受け、さまざまな意見が提出されたが、賢治作品への理解度や震災復興への今までの接し方など討議ベースそのものが各聖によって様々であったので、非常に難しい問題であることを痛感した。

まず、自己紹介と同時にそれぞれが宮澤賢治についてどの程度知っているか、復興の教化にどのように用いることができるかを問うところ、以下のような意見が出た。

・賢治Ⅱ国柱会のイメージが強く、国柱会は折伏的であるので、賢治自身も折伏的なのではないか。

・「雨ニモ負ケズ」は復興精神につながる。

・詩の中のさまざまな方向（東西南北）へ「イッテ（行つて）」というのは、待つ姿勢ではなく非常に行動的であり、菩薩行に通じる。

・「雨ニモ負ケズ」は応援につながる、人生の応援歌として受け止められている。

・我々は「応援するもの」を求めている。その「応援」は「祈り」につながる。

・ヨーロッパでは「雨ニモ負ケズ」もいいが、我慢のし過ぎではという意見もある。（欧米では「がんばって」を「我慢」と訳された。）

仏教の復興とはまさに布教そのもののあり方であり、「震災の復興と布教」のために我々は宮澤賢治から何を学ぶべきかを考えるきっかけに、賢治作品・思想を法話に使ったことがある場合はその内容を、使ったことがなくても改めて使えるのではないかと思ったことがあればその内容を問うたところ、以下のような意見が出た。

・「世界全体の幸福がなければ、個人の幸福はありえない」というのは菩薩行の実践である。

・『よだかの星』は捨身供養を説いている。

・賢治の作品には法華経の精神が「文底」にある。よって、それを探するのは難しい。

・宮澤賢治が法華経・日蓮大聖人の信者だと言ったら引かれる。宮澤賢治の「イメージ」がしぼんでしまう。

・上記意見に対しては、それは僧侶たる我々の責任であり、壁を取り除く努力が不可欠である。

・我々はお経を読んで布施を受ける、檀家に支えられている。対して賢治はお寺とは関わらない、関わらないからこそ詩が弘まる。

・我々は賢治を「利用」しようとしてはダメである。

では我々は、賢治の思想を学び、仏教の復興・震災からの復興を考えると、どのような可能性を見出せるか（方法論や心構えなど）を問うたところ、以下のような意見が出た。

・僧侶自身が「三界火宅」に在るという認識（危機感を持つこと）が必要であり、宮澤賢治の信仰表明を受けて「お題目を唱えましょう」と共に実践する。（「お題目を唱えなさい」ではない。）

・「雨ニモ負ケズ」の詩の中で、「ジブンヲカンジョウニ入レズ」というところが大事であり、国柱会や信仰云々を言うより、「自分を感情に入れ」という精神を大切にすべきである。

・「イッテ（行つて）」が菩薩行であるならば、お寺にとどまっているのではなく、「寺を出る」「出かけていく」という行動・言動・実践が必要。

・賢治の作品を解説するより、「私自身」という一人称の私をどうするかが大切。

・お題目を表明するのではなく、自分の心に秘して行動すべきである。

・世の中に自分が必要とされていないという疎外感がある。ボランティアをすることによって得る心境が「雨ニモ負ケズ」に表れている。

・「ジブンヲカンジョウニ入レズ」は目指すべき境地、悟りを示すのではないか。また「不惜身命」のことではないか。

・「デクノボー」は常不輕菩薩の精神であると受け取り、我々の規範としなければならない。

三、まとめ

問題提起の中でも述べられたが、アメリカ仏教・賢治の仏教思想の共通項は「超宗派性」「平等性」「社会性」の三点であり、震災後の宗教者の活動・被災地での宗教者の実践はこの三点を有している。

よって、賢治の仏教思想と実践は、震災と仏教の両方の復興となる。

文底には法華経・お題目を持ちつつ、それを見せずに実践する。

結果として「お題目信仰者」の行動であり、その行動の基盤に「法華経」があることが伝わると、非常に有意義な「布教」となる。

例えば、表には「デクノボー」として表現されつつ（超宗派性・平等性）、その文底には常不輕菩薩の精神がある（宗教・思想）。

ここで重要なことは、「超宗派性」の定義であるが、これは「他宗派と手を携え」て行動するという意味ではなく、「平等性・社会性」を有しつつ、その根底に法華経・日蓮大聖人のみ教えが息づいている、ということである。

例えば、ダライ・ラマが「思いやり」「平和」など社会に対して仏教を仏教語を使わず平易に説き、強制的に改宗を求めないが、その根底にはチベット仏教の精神・思想が脈々と息づいており、結果として社会・メディアを味方に付けて帰国への空気が生じるようなものである。

1、超宗派性

「信仰を表明しない」＝「お寺（日蓮宗・法華経）が関わらない」からこそ弘まっている、という社会の動向を的

確に認識し、僧侶自身が反省し、質の向上を図らなければならない。

2、社会性

「イッテ（行つて）」寺にとどまるのではなく、寺を出て行動・実践を心がけ、外向きの活動が必要である。

ボランティアなども含め、内に信仰を秘めて実践をすることによって、結果として「布教」につながるということを知る必要がある。

しかし一方では、宮澤賢治を理解し、檀信徒に解説し、さらなる信仰増進をはかることも必要である。

最後に、何をおいても「自分が変わる」勇氣と努力が欠かせず、自分は悩み、そして葛藤しているかを常に問いながら着実な一歩を踏み出すことが重要である。

第二分科会

「雨ニモマケズと全体幸福―宮澤賢治と復興の敎化学」

（震災復興に於ける宮澤賢治の用いられ方の事例研究を通じて）

座　　長　　大乘文晴

問題提起　野村佳正

助　言　者　有本智心

記　　録　　高平妙心

運　　営　　黒木源章　佐藤拓温　馬島浄圭

時の首相をして「国難」と言わせた東日本大震災、そのまさに復興のキックオフとして、そこかしこで引用された宮澤賢治のことは、この賢治ブームとも言うべき現象を、法華経を広めるきっかけと捉え、それをどう生かしているのか、具体的な活用方法を考えてもらい、議論を通して、参加者（二十四名）それぞれが布教に役立つヒントを持ち帰ってもらったことを目指した。

一、問題提起

震災復興にあたって、被災者のみならず、日本全体を励まし勇気づける言葉として、宮澤賢治の様々な文学作品が、

多様な立場の人びとによって用いられ、言わば、復興への象徴としての意味を持つに至っています。

そうした事例の代表的なものに、内閣総理大臣と文部科学大臣の中高生へのメッセージにある『銀河鉄道の夜』の「ほんとうのさいわい」、岩手県知事の「頑張ろう！岩手」宣言に引用された『農民芸術概論綱要』の「ぜんたい幸福」、そして、枚挙に暇のないほど、そこかしこで用いられている「雨ニモマケズ」などを挙げる事が出来ましよう。

宮澤賢治の作品の多くが、法華経の教えをモチーフとしていることは、よく知られているところです。つまり、こうしたことは、そのことばを用いた人が意識しているといないとに拘わらず、法華経信仰を語っていることになるとも言えましょう。したがって、宮澤賢治を通じて、そこに内包されている法華経にふれ、立ち上がり、前進しているのだと言い得るかもしれません。

この分科会では、上記の他、震災後の様々な場面で用いられている宮澤賢治のことばの事例を参照し、そうしたことばの意味を再確認するとともに、宮澤賢治を通じて法華経信仰を伝え、震災復興のみならず、仏教復興へと繋げて行く方途を論じ合いたいと思います。

二、分科会討議

座長から議論を深めるための様々な切り口が投げかけられた。まず、「雨ニモマケズ」が記された賢治の手帳のレブリカを各自に回し、度々記されたお題目・大曼荼羅を再確認した上で、大震災を契機として用いられた具体例を紹介する。俳優・渡辺謙の「雨ニモマケズ」の朗読、ロンドンのウエストミンスター寺院やワシントンの大聖堂の東日

本慰霊式典で読み上げられた「雨ニモマケズ」、総理大臣・文科大臣の声明や岩手県知事の震災復興への決意表明等。祈りの場や耐える東北人を称えるようにして用いられている。祈りとしての宮澤賢治、ある意味これまで封印されてきたその宗教性を、今どのように布教に生かすべきか。他方、三月一日のNHKのクロースアップ現代「支岐に立つお寺 問われる宗教の役割」で報告された期待度調査によれば、仏教に期待する人は九十％・お寺は二十五％・僧侶は十％という危機的な状況がある。こうした僧侶に対する厳しい見方がある中、震災現場に赴いた僧侶で、多くの人々のここをとらえたのは、ひたすら祈る禪僧の姿だった。法衣もまともずボランティアとして現場対応に奔走した僧侶も多くいたが、こちらの方は余り気になけられなかった。それで良かったのか。賢治の宗教性といえばデクノポーの精神・菩薩行とイーハトブでいうところの娑婆即寂光ということになる。この本質についてあまりにも語られてこなかったこともある。例えば、教育現場でも宮澤賢治をいかに教えるべきか教師が頭を抱えている。宗教性を抜きにして教えなければならないことが、逆に賢治を解り難くしている。これらの現状をふまえ、賢治をこれまでどう語ってきたか、これからどう伝えたいかを考えて、二日目の分科会討議に臨んでもらうよう促し、まずは、東日本の被災地を訪れた方々の話を伺い、その経験を共有することとした。

参加者中、五人が被災地入りしており、内四人は僧侶という立場を全面に出すことなく、汚泥処理や救済物資を届けたり、マッサージ治療などを通して被災者支援をしている。一人は、法衣をまもって宗務所所員の僧侶たちと慰霊行脚をし、汚泥処理のボランティア活動もこなしている。また、募金活動や管区の護法大会で塔婆供養を営み一二〇万円を義援金に当てるなどした。被災地の言語を絶する惨状を目の当たりにした者として、今後も継続的に関わっていく必要を痛感している。只、ほとんどが、宮澤賢治を意識して行動したというより、居ても立ってもいられないという思いに突き動かされて現場に駆けつけ、気がついたら賢治がそこに来ていたという認識であった。

二日目は、ＡＢＣＤの小グループに別れて討議することとした。共通の質問（①東日本大震災を受けて何をしたか？ ②できなかったこと・今後やりたいことは？）を投げかけ、配った付箋にそれぞれ答えを書き留めてもらい、議論のきっかけとした。最後に、各グループのまとめ役から、とりまとめた付箋の回答と討議内容を発表してもらった。

以下に、箇条書きにして紹介する。

①の回答

- ・ 回向供養、復興祈念、四十九日・百カ日法要など
- ・ 義援金集めのチャリティーイベント・街頭での募金活動・物資支援
- ・ 被災地でのボランティア活動
- ・ 被災地での慰霊行脚
- ・ 被災地へのお見舞いをした・千羽鶴を送る
- ・ マッサージ師の技能を生かした被災者治療と支援物資の配布
- ・ インターネットや電話での悩み事相談
- ・ 避難者が永住できるよう自治体に働きかける
- ・ 被災地でできない火葬を受け入れた際の回向供養に出仕
- ・ 被災した自坊を避難場所になるよう修理して耐震強化する
- ・ 原発事故に関する情報収集と原発停止要請の署名活動

②の回答

- ・ボランティア活動を行ったが不十分であった
- ・現地でお経を読んだりという活動はとてできなかった
- ・そもそも被災地に赴くことができなかった
- ・宗務所や管区単位でまとまった活動ができればよかった
- ・個人の支援活動には限界がある、宗門的なバックアップ・サポート体制が必要
- ・危機管理体制の確立
- ・災害ボランティア等のネットワーク化が図ればいろんな事ができるはず
- ・宗門内でボランティアを登録制にして、適材適所に派遣できないか
- ・募金活動がだぶついたりして、義援金の送金のあり方が問題ではなかったか
- ・募金活動や回向供養の継続、一周忌法要を計画

これらの現状をふまえ、さらに、被災者とボランティア活動に参加した人々の琴線に触れた、宮澤賢治の精神について意見を出し合い、気づきを共有した。

□共有された意見

- ・泰然自若ではなくじっとしていらなくて飛び出して行き被災者に寄り添い問題を共有しようとした、その行動こそ賢治の精神そのものではなかったか
- ・じっと耐えているのではなく、「行つて」なにかをする事に意味があり、偽善と見られようと、やらない善より

やる偽善でいい

- ・福島原発事故現場で懸命に働く人々の姿は『グスコープドリ伝記』に描かれた、みんなを救うための自己犠牲の精神を彷彿させ、震災によってそういう意識が呼び覚まされた
- ・日本全国総宮澤賢治化、我々がその先兵に
- ・「雨ニモマケズ」には自行の部分もあるし化他の部分もある
- ・菩薩行の実践について、もっと一般人たちがわかるような教箋を作る必要がある
- ・賢治がその作品を通して、宗教性を表に出さないと法華経の精神を伝えようとしていた点に学ぶべき
- ・身の回りのできることを、菩薩行として実践していく、そういう人を増やす布教が大切
- ・僧侶にしかできない回向供養を、もっと自信を持って行う

まとめ

最後に三師の意見をまとめとして紹介したい。

大坪師 復興支援に際し、現地に行った賢治がいたり、後方支援に回った賢治がいた、賢治の菩薩行を受け入れた人があちこちにいるということになる。だとすれば、日常の場でも賢治的な存在を育成する活動、ひいては、お題目を唱える賢治を増やす布教ができないだろうか

佐藤師 「雨ニモマケズ」は一人歩きしているが、ここでそれに気づいたと言うことが大切であり。「道心を忘れず凡夫のままに生きる」デクノボーの精神に

高平師 年齢に関係なく老いも若きも、宮澤賢治という共通の話題で心を通わせることができた。ここで賢治の宗教性に何らかの形で気づけば、それで意味がある

宮澤賢治の多面性と、作品にある豊かな象徴的な表現の底に秘められた、法華經の精神をくみ取るとは容易ではない。それにもかかわらず、この大震災の痛手から立ち直ろうとしている時、内外で賢治の言葉が頻繁に用いられ語られた。まさに、基調講演で正木晃先生が指摘された「文底秘沈」の宗教性が一人歩きしていた状況であった。その最中で、「復興の教化学」として宮澤賢治を布教に生かす方途を忌憚なく論議できたことは有意義であった。ただ、当初の予想通り、参加者からは多様な経験と意見が述べられ、全体として一定の方向性を導き出すには至らなかった。多様な意見をそのまま共有し合いながら、宮澤賢治の周辺をオロオロと巡っているような感じでもあった。宮澤賢治を布教に生かすための論議は、端緒に終わったばかりである。

第三分科会

環境と復興の敎化学（原発問題と敎化学）

◎運営について

助言者 伊藤如顯 新聞智照

分科会座長 小林貫誠 藤崎善隆

問題提起 梅森寛誠

運営 石伏叡齋 灘上智生

記録 齋藤宣裕（敬称略）

第三分科会は本年三月十一日に起こった東日本大震災による福島第一原発事故に関する問題をテーマに行なわれた。原発問題は現在、連日各種メディアに取り上げられ、我々にとって最も関心の高い問題のひとつと言える。当分科会は二十四名の参加の下で非常に活発な議論がなされた。また、長年にわたって原発問題に取り組んで来られた梅森寛誠上人より、今までの取り組みや原発問題の現状について、さらに宮澤賢治の思想・行動との関連と今後の課題について問題提起を行なってもらった。問題提起者への意見・質問等も多く見られ、活発な意見交換のきっかけとなったように思われる。

一、問題提起

この分科会において問題提起を行なった梅森寛誠上人はこれまで二十年以上にわたり、脱原発を訴え続けてきた。そして三・一一の東日本大震災により最悪の事態として福島第一原発事故が起こってしまった。今回の東日本大震災は「原発震災」であり、原発事故によって現在は「国民総被曝」ともいえる状況である。原発事故はまさに究極の環境破壊であり、その復興再生への道のりは残念ながらもまだ遠く険しいように思われる。深刻な事故が起こったにも関わらず、事故直後にはヨウ素剤の配付も妊婦や乳幼児の緊急避難も行なわれておらず、政府のこれまでの対応は失敗と言わざるを得ない。さらに緊急の課題として、本年四月に文部科学省が「子どもが屋外で活動する際の放射線量の基準として年間二〇ミリシーベルトまで許容する」としたことによって、次世代を担うべき子どもたちが大変な危険にさらされていることが挙げられる。また最近では放射線の影響による食の問題も深刻になっている。今、我々宗教者には何ができるのだろうか。

宮澤賢治は『農民芸術概論綱要』『農民芸術の興隆』において「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い」「科学は如何 短かき過去の記録によって悠久の未来を外部から証明し得ぬ」「いま宗教は気休めと宣傳 地獄」と語っている。これはまさしく現在の日本の状況にも当てはまる。しかし賢治はそのような状況にあっても、自らの法華経信仰に基づき実際に社会と交わりイーハトヴの実現を目指した。また、物理学者・理学博士であり核化学の専門家であった故・高木仁三郎は、宮澤賢治の作品との出会いによって自らを「市民科学者」と称して原発の危険性を訴え続ける道を選んだという。核化学の専門家という立場でありながら市民と同じ目線に立ち、生涯をかけて脱原発を目指し続けたのである。このような宮澤賢治や高木仁三郎の姿に、今こそ我々は学ぶべきである。

我々はこれまで「原子力の平和利用」という言葉に騙され、知らぬ間に原発のある世界が当たり前となり、取り込

まれてきた感がある。「立正平和運動」においても反核を訴えながらも原発には至らなかった。今回の分科会ではこれまでの反省とともに現状の確認を行ない、原発の是非について論じるのではなく、このような危機的状況の中で我々は日蓮宗の教師としてこれから何をすべきなのかを討議することを目的とした。

二、分科会討議

二日間で合わせて四時間近い分科会であったが、参加者は高い問題意識を持って会議に臨んでおり、とても密度の濃い分科会となった。その内容については以下のようにまとめさせていただく。

《福島第一原発事故に何を思うか》

◎復興再生の见えない現状

- ・ 目に見えない放射性物質による不安。長期にわたる避難が必要。
- ・ 緊急課題として子どもたちを守ることと食の問題がある。
- ・ 福島から離れた土地でも農業は大きな打撃を受けている。
- ・ 政府や電力会社、メディアへの不信任。情報が溢れていて何が正しい情報なのかわかりにくい。

◎今までの反省、懺悔

- ・ これまでは原発問題が環境問題として考えられてこなかったのではないか。
- ・ 原発はよくないものだと思っただけで、結局何もしてこなかった。
- ・ 福島から遠く離れた場所で暮らしていると、なかなか実感がわかない部分がある。

・震災から半年が経ち、少し意識が低くなってきた感じがする。

・「原発反対」という声をあげない宗門への不満。

・僧侶が声をあげてもなかなか世間に声は届かない。

※知識不足や認識不足、これまであまり活動をしてこなかったことへの反省・懺悔の声が多かった。

《これから我々に何ができるか》

◎これから何をすべきか

・専門家の肩書きや耳慣れない単位、数字に惑わされず、日々アンテナを張って正しい知識を身に付けていく。

・専門家の判断を待つのではなく、自らが先頭に立つ思いで原発反対の声をあげていきたい。

（反対の声をあげてすぐに解決する問題ではないので慎重に行動したい、との意見もあった。）

・節電を心がけ、福島産の農作物を積極的に購入する。

※「正しい知識を身につけて積極的に原発反対を訴えていきたい」という声が多数だったが「簡単に口に出す言葉は響かない」という慎重な意見もあった。

◎日蓮宗の僧侶として

・お釈迦さま、お祖師さまの教えを伝え広めていくことが復興につながる。

・正木先生の基調講演にあった通り、まずは「葬儀・回向・供養」を大切にしたい。

・やはり我々は「祈る」ことが最も大事だと思う。

・今まで電氣を使い過ぎてきたのではないか。物の豊かさよりも精神的豊かさを求めるように価値観のシフトを促したい。

・福島の子どもたちへ疎開先の提供。寺子屋活動を活用したい。

・ソーラーパネルの設置など、お寺も自然エネルギーへの転換をしていきたい。

・お寺はコミュニケーションを提供する場所である。積極的に地域の人たちと交流して不安を取り除き安心を与えたい。

・宗門から国への提言、働きかけをしてもらいたい。

・モチベーションを保ち続け、檀信徒へ発信を続ける。

・専門家との連携を考えてはどうか。価値観のすり合わせが必要ではないか。

・緊急災害時には各寺院の取り組みだけではなく、横のつながりや連携が大事。今後は災害対策の組織化も考えていきたい。

※我々ができることは「祈願・回向・供養」であるという意見が大変多かった。また、復興再生には長い期間が必要であることから「これからずっと継続していくことが大事」という意見も多く見られた。

三、まとめ

今回の第三分科会のテーマ「原発問題」は、現在最も注目されている問題のひとつであり、議論は大変活発であった。連日各種メディアで報道がなされていることもあり、それぞれが事前に原発問題に対してかなりの知識・情報を

持つて会議に臨んだことにより、問題提起からスムーズに議論に入ることができた。ただ、我々がなぜ今行動を起こすべきなのかという理念・教学的裏付けの確認、そして我々は今何をするべきなのか、「祈願・回向・供養」を行なった上で、さらに今求められているものは何なのかという部分の議論を尽くせなかった感があり、その点は悔やまれる。

今回の分科会では「しっかりと現状の確認とこれまでの反省・懺悔」そして、それをふまえた上で「我々は宗教者として、日蓮宗教師として何をすべきなのか」を議論した。悲惨な現状の中でこれまで原発問題に関心が薄かったことへの反省、何も行動してこなかったことへの懺悔の声が多く聞かれ、この国の原子力行政のターニングポイントともいえる今こそ実際に行動を起こすべきである、という意見にまとまったように思える。

それでは我々は実際にどんな行動を起こせばよいのだろうか。以下、私見を述べさせていただけば、我々は今こそ宮澤賢治が社会参加によってイーハトヴの実現を目指した姿を思い起こし、これまで以上に積極的に社会へ関わっていくべきであろう。そして社会との交わりの中で、檀信徒や地域の人々とともに原発問題について考え、様々な問題に悩み、答えを模索して実際に行動していく。そのような姿勢の中にこそ、悩み苦しむ人へ安心を与えるヒントや教化のきっかけがあるのではないかと思う。その積み重ねこそが今回の原発問題からの復興、ひいては仏教復興の糸口にはならないだろうか。（もちろん「祈願・葬儀・回向・供養」の重要性については言うまでもない。）

現在、宗門で取り組んでいる『立正安国・お題目結縁運動』は、「いのちに合掌」のスローガンのもとで「敬いの中で安穩な社会づくり、人づくり」を目指す運動であるが、原発問題への取り組みはまさにこの宗門運動と合致する。まさしく原発問題とは「いのち」の問題なのである。我々は三月十一日をきっかけに変わらなければならない。宮澤賢治は『農民芸術概論綱要』において「われらの前途は輝きながら峻峻である」と記している。輝ける前途のために、峻峻な問題に対して今こそ我々の行動が求められている。

第四分科会

てらこや活動と羅須地人協会（社会活動への取り組み）

分科会座長 柴田章延

副座長 河崎俊宏

問題提起 加藤慈然

助言者

記録 松田英秀

運営 原顕彰・馬渡竜彦・坂輪宣政・原一彰

参加者 二十七名

一、問題提起

この分科会では寺と地域の関係、地域での役割、すなわち今、公共性を求められている寺が開かれた寺づくりを目指すためになができるか、どのように貢献するかを探ることを目的とする。そのヒントとして羅須地人協会と数々の活動にチャレンジする加藤慈然師（広島県尾道市・妙宣寺）にスポットをあてる。

「寺おこし」活動に専念するのではなく、「町おこし」活動を通じて、地域を中心としての寺院の役割を明らかにし

て双方の活性化を進めている加藤慈然師を発題者にむかえ、師の羅須地人協会観、地域での活動について報告を受けた。さらには「あなたのお寺・地域の未来」という課題で師にコーディネーターを務めてもらい、問題点を拾い上げ、アイデアを捻りだし、解決策を模索する共同作業を行い、お互いの経験や知識の提供、年齢差を越えての議論等の経験をした。

師の報告をまとめると「羅須地人協会観」、「過疎地寺院の活性化」、「今回の震災に際しての支援活動」の三点になる。

師は羅須地人協会から農業知識や芸術鑑賞の機会を与えるものの決して上から目線で行っていないこと、立場を超えて人と人として支えあうこと、理想主義的にすぎるほどの無私の精神を読みとっている。そして法華經の信仰に基づき、その理念を具体化したものが、賢治の諸活動であると位置づけた。

現在は代務を務める本立寺（広島県竹原市）は「かぐや姫美術館」として地域を巻き込んだ数々の活動で知られるが、活動内容については「地域の中でキラリと光る、活性化寺院」（宗報平成二十年十一月号）を参照されたい。

活動の原点は阪神大震災の復興ボランティアに参加したことで、様々な人達と共に活動したことにより社会活動の大切さを意識したことにある、という加藤師の今回の震災に際しての活動から被災地の子供達へ文房具を送り届ける迄をスライド上映とともに紹介した。その解説のなかから印象深かったのは「自発的に人があつまる」、「自由な発想で活動」、「学びあう」、「つながる」という言葉であった。人を集め、教え、つながることに腐心している参加者にとっては驚きの報告となった。そして何時あるか分からないが緊急を要する事態の為にあって準備するのではなく、常日頃からゆるやかな連携を保ち続ける組織を作り、その組織に方向付けを与えることで大きな力が発揮されるという師の組織運営術には目をみはるものがあった。

師は日本には結・講・座など様々な形の支えあいの場が過去にはあり、江戸期の寺小屋は一万五千を数えるなど、

寺は地域のハブ（結節点）としてこれからも活躍することが可能であると結論する。その傍証として支え合いと活気のある社会の構築のために昨年、内閣府が発表した「新しい公共宣言」の中にもそれらの伝統的な組織についての記述があることを紹介している。

二、実践「描いて、ちぎって、渡して、ポン！」

発題者の提案で、「あなたのお寺・地域の未来はどうありたいか」というテーマである発想を具現化するためにアイディアを出し合う共同作業を経験することにした。そのねらいは住職ということで自分がリーダーとしてなにもかも運営しなければならぬと考えている参加者に作業の間に共同、協調、自分以外の発想の生かし方などに気づいてもらうことであつた。手順は次の通り。

- ・各自がテーマに沿ったタイトルと一枚のイラストのみで将来像を描く
- ・その中から一点を選択し、その実現に向けて参加者が様々な意見を加えていく
- ・意見をメモにして、分類してイラストの周囲に貼り込む
- ・作業中は決して消極的、否定的な言明はしない
- ・途中で視点を変える為に、テーマを交換して意見を出し合う

このような条件で「ドリフト寺をつくらう（目的…地域の迷惑暴走行為の解決）」、「おやつ寺をつくらう（目的…地域の名産品を活かす）」の二ヶ寺の実現に向けて模造紙一面が埋まるほどの意見が集まった。その過程で次のような気づきがみられた。

- ・ 図だけで人に物事を伝えることの難しさ
- ・ 未来のことなので年長の参加者も若い参加者の意見に耳を傾ける
- ・ 経験に裏打ちされた年長者の意見の貴重さ
- ・ 自分の小さな発想がどんどん広がり、具体化できそうな高揚感
- ・ 他寺であっても、その活性化のために知恵を捻り出す楽しさ

作業中にはしばしば笑い声もおこり、最初には荒唐無稽に思われたことも様々な発想を取り入れることにより、最後には実現可能なものに近づけることができた。お互いに初対面にちかい参加者が打ち解けて「次はどの寺を」とイラストを手にとるなど、この試みには寺院活動の新しい視点があったように思われる。すなわち、寺で様々な活動を展開することの大切さと同時に、役職や先輩後輩の関係を基準とする管区等の系統だった事業だけでなく、僧侶もゆるやかなつながりを持つべきであるということである。

なお、作業中のブレイクとして馬渡竜彦師（嘱託・千葉県山武市妙国寺）から複数宗派にわたる地域寺院の活動報告があった。ポイントは同じ地域にあれば宗派は異なっても同じ危機意識をもつ僧侶と連携できること、全てを一人でやろうとしないこと、宗派の枠を超えた組織をつくることによって行政の協力を得られる場合もあること、等であった。

第五分科会

救援の思想と復興の現場

座　　長　　小林康洋

問題提起　石原顕正

助　言　者　木村勝行

記　　　　録　伊藤美妙・延本妙泉

運　　　　営　川名湛忍

分科会参加者　十一名

【問題提起】

三・一一東日本大震災発生

地球の身震いひとつで、人間の営為が烏有に帰す。

あまりにも巨大犠牲を前に、私たちはただ言葉もなく、茫然と立ち尽くすのみ。

おそらく二万を超えるであろう人びとが瞬時に今生の命を断ち切られました。

辛くも生き延びた人びとも、別れの言葉ひとつ交わすことなく、肉親や友人を亡くすのみならず、生活の基盤を失

いました。

かけがえのない命を失った悲しみや無念、直面する生活の困難……

〈台湾レスキュー隊来日〉

震災発生以来、現地の情報収集に追われる中、一本の電話。

―台湾から来日したレスキュー隊三五名が被災地に向かうことが出来ず、都内で足止め状態になっています。

―緊急事態です。一刻も早く現場に入り行方不明者の搜索にあたなければなりません。

―これは人道支援です。誰の依頼でもなく自らの意志で来日した民間のNGOです。

「わかりました。なんとかやってみましょう。」

思わずそう答えてしまってから、「こんなこと請け負ってしまって大丈夫なのか」と、自身に問いかける。

〈行方不明者の搜索から遺体収容〉

夜通し走り続けて、岩手県大船渡に到着。一睡もできず、直ちに、現場指揮所で大船渡市内の搜索現場を指定された。

足元に加工用魚が散乱している、水産加工場が点在していた場所であろうことは容易に推察できた。

みぞれ混じりの最悪の天候。休憩所もなく、食糧缶の冷たいお粥を啜る。

台湾レスキュー隊の現場拠点では生存者の収容を目的としながらも、遺体収容に向けた「屍袋」などの装備品が目につく。

呂隊長の指示の元、瓦礫の中へ搜索に散る隊員たち。まもなく「遺体発見」の一報に現場指揮所に緊張が走った

……。

〈祈り〉

発見されたご遺体に回向を捧げ、改めて宗教者としての自身を見つめ直す……。

〈菩薩行の実践〉

多くの無情や悲しみに接しはしたものの、本当に相手のところを見出すことができたであろうか。

目に見えるモノ・カネの不足や労力をまかなうことばかりではなく、一人ひとりの心の内に人間の尊厳を見出すことが復興への大きな要素になるのでは。

今こそ「本当のやさしさ」が必要。自分の幸福にもまして他人の幸せを願える人々を増やしたい。

人と人との絆によって個人やコミュニティの再生が可能になるのでは。

【分科会討議】

討議に入る前に助言者の木村勝行師（大船渡市本増寺住職）からの被災地と避難所となった境内の状況と「三つの行動」①迅速に行動する。②将来の話し合いや避難者の自立を促す。③物資の独占を禁止して平等に渡す。これを定め行動したとの報告を受けた。復興に進む中で、ある檀信徒の声「復興のスピードに心が追い付いけない……寂しい……」という言葉があったことも紹介された。この後に参加者より各地の当時と現在の報告求めた。

被災地宮城では「覚悟と準備はしていたが想定外だったこと。これは直近の地震やチリ地震などの過去の経験が妨げになった面もあると思う。そして震災直後は情報不足から孤立への不安があった。この震災があった今だからこそ

祖師の生き方を学ぶ時ではないか？」

関東では「間接的な災害としてガソリン不足や計画的停電に困惑した。関東は今後、何をすべきか？ 檀家や地域とのかかわり方について、視線を下げずに視点を下げることで、併せて危機感の共有を伝えやすいので写真や資料などを配布できないか？」という要望も出された。

西日本では「距離感から温度差があり半年も経過したら話題にもならない。今後メッセージを発信する手段が必要だろうと。我々が出来る事と出来ない事の判断も重要であろう出来ることとしては。家族を失った子供たちへのケア・法華経を通した心のケアがある。」また「祈る事が出来ると、祈る事しか出来ない」の差異もあるが「祈ることの大切さ」を強調された。

九州では「遠距離の被災地支援は困難な面がある。危機管理意識の向上が大切であり風化させないようにしたい」特に福岡では「危機管理意識の向上が大切として地元の研究会議でも災害に関する議題を取り上げている。台風大雨からの被害が有る地域の為に寺院が避難所に該当する情報やAED設置寺院などの県内寺院の情報を既に作成済みだ」と紹介された。

●各師の意見要約

- ・他教団を研究する。日蓮宗ができることを考えるべきだ。
- ・関心のない方が多い
- ・被災地との距離で温度差がある。
- ・情報源が異なる外国人の避難は素早い。日本人は情報不足だったのか？
- ・寺院の防災訓練から意識向上を望む（火元責任者・避難計画書など作成し宗門が把握）

・我々が出来ることを考える。

・心のケアは僧侶がすべきで、〴〵祈ることしかできない〴〵↓〴〵祈ることが出来る〴〵がある。

・僧侶になった事の縁を大切にする。

・菩薩行の再認識

（菩薩行の不履行が〴〵三離れ〴〵の原因でもあり宗門はヌルイし、私たちもヌルイ。）

・地域との信頼関係

・人と人との信頼関係を改めて思うことが出来る。

・（九月時点で）半年経過して心の病等が心配されている。

・全日青からは日蓮宗は個々の集団である。他教団の組織力を学ぶべきだ。依頼されたことは何でも行う。

●問題提起者より

・人と人とのつながり・絆↓無ければ無縁社会化

・情報の共有

・被災者とう寄り添うか（人数分の悲しみが有る）

・また災害後の行動に対して事前に出れることは何があるのか？

絶対安全な場所など無い。いつどこでどんなものに襲われるか自分の命は自分で守る。

その結果、援助支援が行える・援助支援の対象ともなる。

この援助する側の行動に傲慢が有ってはならず菩薩行でなければならないのだ。

菩薩行の実践を見直すならば、善い事をした。これは自己満足であり菩薩行なのだろうか？ 変化の人、の行動ならば相手が変わって行くのが判り、相手の心に仏を見いだせるだろう。これは菩薩行の求める到着地でもあろう。菩薩行を行う僧侶は、視線を下げるのはダメであり、視点を下げなければならない。僧侶間での温度差は無くする。温度差を埋める為には、僧侶は遠近に拘らずに災害を同サイズで視ることが必要だ。また人（誰）が人を温めると説くのではなくて、誰を私に置き換え、私が人を温めるという意識を持ち自身が核になる事が大切である。

被災地には宗教性が不敵な場面もあり僧侶の姿を前面に出せないこともあるが、これは妙音菩薩品に顕すように、姿形を相手に合わせ僧侶の姿を出さずに説き接するも菩薩行なのだ。様々な悲しみの心が有り復興の速度に心がついていけない衆生が多く存在する事を知り、弱った衆生に寄り添いコミュニケーションが生まれ、彼らが求める姿に変化できる。

迅速に対応するためには各師が変化できる姿（技術と資格または得意分野）を事前に把握してあれば適材適所に配置が可能になり速やかに菩薩行の実践ができるのではないか。さらにカウンセラー資格については立正大学・身延大学在学中にカウンセリングライセンスを取得させるのはどうかという意見もあった。また他方では人の痛みを受容するのが僧侶であるから行政のライセンスは必須ではないとの意見も出された。現場ではカウンセラーがカウンセリングを受けていた事象もあり、生死観を知る僧侶こそが公的資格が持たずとも活動出来る分野だろう。さらには何の為に僧侶になったのか問うべしという意見もでた。

行政下のボランティアでは得意分野を活かした菩薩行が実践しにくい面がある。しかし宗内で情報が一元化されていれば実践の場所は求め易くなる。被災地直近の寺院は中継基地にもなる。いみじくも今回の震災では僧侶同士の繋

がりや寺院と地域との繋がりが有効に機能した面も紹介された。

【まとめ】

阪神淡路と東日本の大震災……被災のたびに苦しみ悲しみを繰り返していくのではなくて、事前に出来ることはないのか？ 支援・救援・復興・再生に我々はボランティア活動と簡単な言葉で括らずに菩薩の行をするという心を持っている事が大切なのだ。

目に見える復興と目に見えない復興、その目に見えない復興には衆生救済だけでは無く仏教・宗教救済・僧侶や寺院の復興のチャンスも含まれている事も知っていただきたい。

〈復興と再生〉

多くの命を同時に失い人が傷つき社会が壊れたその場所へ支援・救援の活動を行い徐々に復興と再生が始まる。まさに「死」を悼み「生」の継続を願う経験をしたのである。その「生」を復興する行動は今までの災害復興の経験をとのように活用するかで大きく変わる。

復興再生とは元の姿に戻る事ではなく、一人ひとりの心が被災を克服して立ち直ることである。目に見える部分だけを創りなおしても「生」の復興とは言えない。

信徒の「復興のスピードに心が追いつかない……寂しい……」と嘆く言葉を聴いたそうだ。その声を聴いた菩薩の初動は、信徒の心の痛みを知り和らげる為に寄り添う事であろう。被災者（檀家信徒を含めて）の心と共に同じ速度から押し上げてゆかねばならぬ。

〈つながる菩薩〉

今回の分科会では「つながる作業」としての〴〵台湾の救援隊と被災地を繋いだ〴〵その体験を紹介した。繋がりを整えることで復興再生を効率よく推進できるが、その取り組みを考察するならば、「人を助けたい」と思うメンバーが集うだけでは善い結果は得られにくい。支援を提供したい人と人とそれを必要とする人の間にコーディネーターが必要なこと、さらに現地での拠点確保も重要であるし、拠点では核に成る人も重要であることが顕れてくる。

〈行の実践〉

菩薩行の実践の場で変化の人に成ることが前提にある。さらに〴〵相手の心が変わって行き、仏の心が見えた時、それを引き出した時が必須の通過点である。そうなるには〴〵本当の優しさ〴〵を持ちそなえる〴〵相手の幸せを願える人〴〵を増やさなければならぬ。併せて相手の幸せを願う人同士の絆を強くすることも必要である。その結果は菩薩行を行う者同士や菩薩行の対象側とが繋がり整う。

〈自由の菩薩〉

「宗門も私たちもヌルイ」との発言が出たが、ある意味では自由に活動できる〴〵自由の菩薩〴〵の集団ともいえよう。組織より核になれると言われる前に、自分から核となり得意分野での実践活動ができる。まさに法華経の妙音菩薩品での〴〵相手の求められる姿に変化をして教化〴〵の通り個々の得意分野の姿に変化をしての菩薩行が行えるのだ。

「寺を留守に出来ず現場に行けないので、祈る事しかできない！」と嘆く必要もなく〴〵祈るだけの菩薩行〴〵も大切なことだ。日本の一部地域の災害復興と観るのではなく日本全土が様々な被災をしたと認識するならば、その国土の中に祈る菩薩行と行動する菩薩行の双方が必要である。〴〵菩薩行を実践する〴〵は僧侶全体が共通認識の上で自由な菩

薩行をする。

〈祖師から賢治、そして私たち〉

日蓮在世の鎌倉期は周知のとおり天災・疫病・荒廃の世であり、その乱世を精視した祖師の幸福観がある。これを失礼ながら宮澤賢治を重ね合わせるならば、賢治は誕生直前の東北地震・津波からの復興中に育つ。祖師が立正安国ならば賢治は岩手の浄土化と全体幸福だろう。賢治の生家は華嚴を抛り所にした家であった。華嚴では全体幸福に事足らずに法華経を求めたようだ。賢治の菩薩化は好ましくないが、祖師を始点に賢治へと線引き、さらにその線を現在の僧侶にまで引けば、私たちも幾つかの災害を体験し死生観を問われ、復旧復興の先にある立正安国に向かうための菩薩行実践の場を得たのである。賢治はおよそ一人でイーハトヴを目指したが私たちは一団となって立正安国を目指している。

〈事前に来ること〉

結論を得る事を目的とせずに行進した分科会だが参加者各師が「事前に来ることは何か？」に対して「変化の人に成れる準備を整えておくこと」という共通認識を得た。